

“瑞穂区将来ビジョン”について

1 概要

名古屋市では、これまでの区役所改革の取り組みを踏まえつつ、10年後の地域社会をみすえた区役所の果たす役割や方向性についての方針として、平成28年度に「区のあり方基本方針」を策定しました。

この方針に基づき、瑞穂区では、区の目指すべき姿とその実現に向けた中長期の取り組みを体系化した「瑞穂区将来ビジョン」を令和2年度に策定しました。令和5年度までの4年間の計画期間で、瑞穂区の魅力を活かした多様なまちづくり活動に取り組んできました。

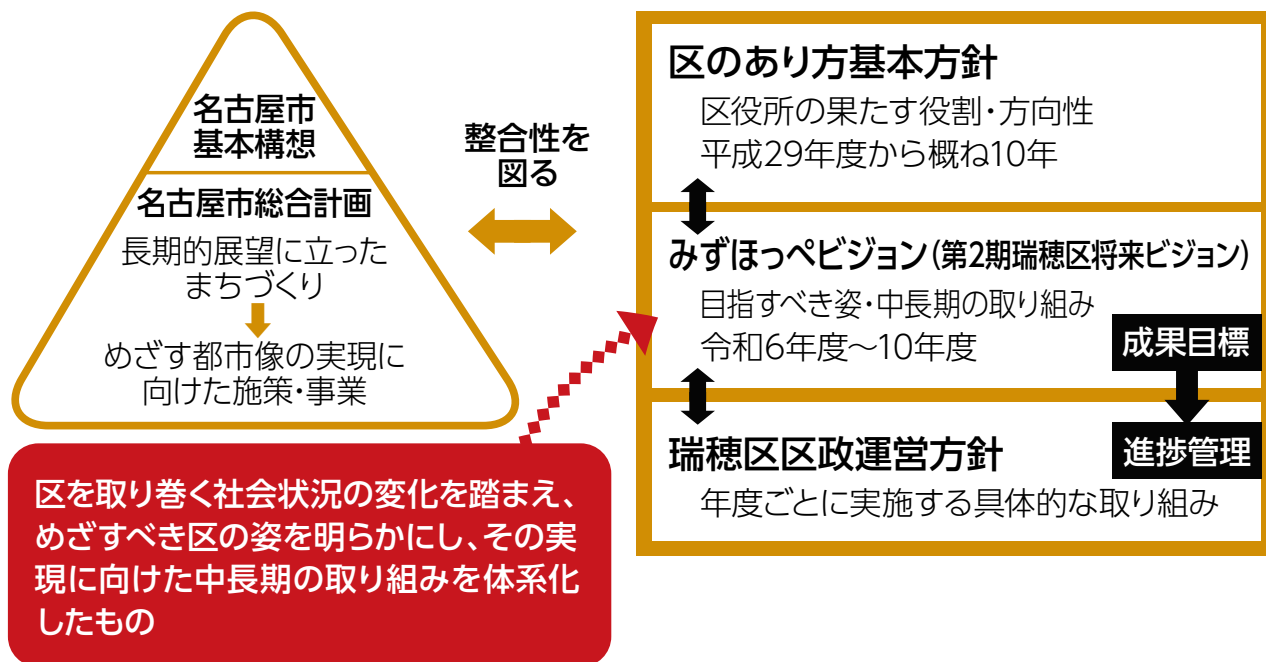
令和2年度の将来ビジョン策定以降、新型コロナウイルス感染症が流行し、地域活動が制限されるなど区政運営にも大きな影響があり、また、さらなる少子高齢化の進行や地域のつながりの希薄化、生活課題の複雑化・複合化が進んでいるなど、私たちを取り巻く社会や地域課題は変化してきています。

第1期瑞穂区将来ビジョンの基本的な考え方などを踏襲しながら、こうした社会状況の変化に対応したまちづくりを推進するため、「みずほっぺビジョン(第2期瑞穂区将来ビジョン)」を策定しました。

2 位置づけ

みずほっぺビジョン(第2期瑞穂区将来ビジョン)は、「区のあり方基本方針」(平成29年3月策定)に基づき、「名古屋市総合計画」との整合性を図り、その個別計画として、策定しました。

また、区政運営方針では、ビジョンに基づいた年度ごとの具体的な取り組みを示し、瑞穂区将来ビジョンに掲げた成果指標の進捗管理を行います。



3 計画期間

令和6年度から令和10年度までの5年間

“瑞穂区”の概要

1 概況

区制施行	昭和19(1944)年2月11日		
面積	11.22 km ²	(名古屋市 326.50 km ²)	
世帯数	52,361世帯	(名古屋市 1,156,744世帯)	
人口	107,690人	(名古屋市 2,326,683人)	※令和5年10月1日現在

区のシンボルマーク (昭和62年10月制定)



瑞穂区のイニシャル「M」を花びらにアレンジし、中央に区内の名所である山崎川の清流を組み合わせ、区の限りない発展と躍進を表しています。

区の木 (昭和62年10月制定) ・ 区の花 (平成元年12月制定)



サクラ Cherry tree・Cherry blossoms ばら科

マスコットキャラクター「みずほっぺ」



生まれた日: 2月11日
チャームポイント: 可愛いほっぺ
性格: 明るく元気いっぱい
趣味: 瑞穂区を散歩すること

持続可能な開発目標 (SDGs) の理念を踏まえて

SDGsとは、Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標) の略称です。国際社会全体がめざすべき17の開発目標を示したものであり、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、経済・社会・環境をめぐる広範な課題に統合的に取り組むものとして、2015年9月の国連サミットにて全会一致で採択されました。

名古屋市は、令和元年7月1日に内閣府より、「SDGs未来都市」に選定され、持続可能なまちづくりに向けた取り組みを進めていることから、瑞穂区においても、SDGsの理念を踏まえながら、各戦略に関連するゴールを明示し、取り組みを進めていきます。



2 誕生

- 明治政府は地租改正上の必要から村の統廃合を積極的に進めており、明治9年9月21日に、近隣19ヶ村を一度合体させ、その上で、6ヶ村(千種村、田代村、広路村、弥富村、瑞穂村、常盤村)に分割するという愛知県の案が大久保利通内務卿の許可を受けました。それを受け、10月7日に、正式に、愛知県が県令(知事)の安場保和の名で管内に通知しました。
瑞穂村や弥富村の村名については、明治元年9月27日に明治天皇が八丁畷で農民が収穫する様子をご覧になり、その際に岩倉具視が「稲穂」を天覧に供したことや将来の発展を祈念して安場県令が命名したと言われています。
- 昭和19年2月11日、昭和区弥富町、瑞穂町始め48町並びに熱田区伝馬町及び熱田東町を合わせて「瑞穂区」が誕生しました。



「明治天皇収穫叢覧」
森村宜稻筆 熱田神宮所蔵

3 地勢

- 瑞穂区は、名古屋市のほぼ真ん中にあり、平野から台地を経て丘陵まで、変化のある地形がひとつの特徴で、区境には新堀川と天白川、中央には山崎川が流れています。
- 区の西部は、沖積平野で、西の境を流れる新堀川は、明治時代の終わり頃、付近を屈曲して流れ大雨ごとに氾濫していた精進川を改修して運河にしたものです。
新堀川の誕生に伴い、水運の便を見込んで沿岸に工場が立地しはじめ、現在でも大きな工場や事業所が多く、セラミック工業や精密工業、金属加工業を中心とした日本を代表する企業や堅実な中小事業所が立地しています。
その東側には、東西の方向に商店街がいくつか並んでおり、下町の風情を今に残しています。
- 平野の東側から区の中央部にかけては洪積台地で、瑞穂台地とも呼ばれています。
台地部の上部は平たんで、戦災を免れたところも多く、密集した住宅地になっています。
- さらに東側は、和風住宅に小さな洋館のついたハイカラな家も残っています。また、この辺りは、明治時代の末から大正時代にかけて、第八高等学校(現 名古屋大学旧教養部(平成5年廃止))や第五中学校(現 瑞陵高等学校)、名古屋高等商業学校(現 名古屋大学経済学部)が立地し、その後も多くの学校が開校し、名古屋の文教の拠点となりました。
- 台地の東側は、山崎川の谷間部に向かって下っており、落ち着いた雰囲気住宅地となっています。
- 山崎川から東側は洪積台地で、八事丘陵と呼ばれています。この辺りは、戦前に区画整理されたところで、八事丘陵の凸凹の多い地形そのままに道路が造られています。最近では分割が進みましたが、広い宅地も多く、緑の多い住宅地がつづいています。



4 特徴

- 「日本さくら名所100選」に選ばれた山崎川の四季の道はじめ、区内には多くの桜並木があります。
- 瑞穂公園は、令和8(2026)年開催の第20回アジア競技大会及び第5回アジアパラ競技大会のメイン会場となる陸上競技場を有し、市のスポーツ振興の拠点としての役割を担っています。
- 犯罪や交通事故、火災が少ない比較的安全な区です。
- 大学3校、短大2校、高校7校や博物館がある市内有数の文教区です。
- 製造業の売上が大きくなっています(16区で2番目)。
- 名鉄名古屋本線、地下鉄桜通線・名城線(8駅)、名古屋高速があり、市内中心部や各方面へのアクセスの利便性が高いといえます。
- 市街化が進んでいますが、山崎川・天白川沿いの水辺環境や、汐路の森、境内林などの緑が残っています。
- 世代別の人口の構成は、高齢者(65歳以上)の割合が名古屋市の平均に比べ高く市内で4番目(令和5年10月現在)となっています。

